

「南三陸町子どもたちとのサマーキャンプ」  
～この夏、生涯の友達と  
最高の思い出をつくる～

平成 24 年 7 月 29 日(日)～8 月 4 日(土) 6 泊 7 日

後援：静岡県教育委員会，山梨県教育委員会  
御殿場市教育委員会



## I 事業の背景（必要性）

平成 23 年 3 月 11 日 14 時 46 分，未曾有の東日本大震災が発生，その後，想定を遙かに超える巨大な津波によって，一瞬にして生活のための家や財産など全てを失い，家族をも失ってしまった人々が多くいた。

あれから 1 年以上が経った現在でも，仮設住宅に生活し，限られた環境の中で精一杯生き抜こうとしている子どもたちがいる。この子ども達の心を癒し元気づけていくために継続した支援を行うことが必要であると考えた。

また，被災していない地域子どもたちが震災を風化させてしまうことなく，防災に関する意識を持つことが重要であると考え，被災した地域とそれ以外の地域子どもたちとの交流事業を実施した。

## II 事業の概要

### 1. 趣 旨

- (1) 震災や避難生活で傷つき，多くのストレスを抱える南三陸町の小学生の心を，同世代の仲間との交流により癒し元気づけ，生涯にわたる友情を築く。
- (2) 被災していない地域子どもたちが，震災や避難生活を送っている同世代の仲間との共同生活により，震災を風化させずに防災に関する意識を向上させる。
- (3) 困難な課題に挑戦することで達成感を味わい，自信を持つ。
- (4) 自然の恐ろしさや恵みを理解し，人と自然のかかわりを考えるとともに，自他の生命を尊重する心情を育む。

### 2. 参加者

#### (1) 対象・募集人数

南三陸町の小学校 5・6 年生男子 10 名，女子 10 名

被災していない地域の小学校 5・6 年生男子 10 名，女子 10 名 計 40 名

#### (2) 参加状況

<学年別>

学年	男子	女子	合計
5 年生	8	8	16
6 年生	16	10	26
合計	24	18	42

<地域別>

地域	男子	女子	合計
南三陸町	10	5	15
御殿場・裾野・小山	6	7	13
沼津・三島・静岡	2	3	5
逗子・秦野・厚木・八王子	5	3	8
愛知県あま市	1	0	1

### (3) 広報の方法

- ① 募集チラシを作成（交流の家作成）
- ② 御殿場市，裾野市，小山町，沼津市，三島市の全小学校の児童に募集チラシを配付  
（各市町教育委員会を訪問し，各学校のボックスに投函）
- ③ 静岡県中・東部地域の小学校に募集チラシを郵送
- ④ 東京都西部・神奈川県西部・山梨県東部地域の小学校に募集チラシを郵送
- ⑤ 中央交流の家を利用経験のある小学校に募集チラシを郵送
- ⑥ 県内および首都圏での新聞掲載を依頼
- ⑦ 静岡県ホームページ：ふじのくにゆうゆうネットワーク掲載

### 3. 日 程

日 曜	午前	午後	夜
29 日	(南三陸町出発)	一般集合 16:00, 南三陸町着 17:00, 対面・交流	
30 月	仲間づくりの活動	野外炊事 (グループ活動)	「樹空の森」 見学
31 火	富士山「こどもの国」での自然体験活動・創作活動		こどもの国活動計画 富士登山準備
1 水	富士登山（須走口）		富士登山準備
2 木	山小屋発→頂上→下山（須走口）		山小屋泊（本7合目） 温泉体験
3 金	富士山麓での植樹体験	振り返り・家族への手紙	お別れ会
4 土	中央発 9:00, 一般解散 10:00		

### 4. 内 容（活動の様子）

#### (1) 「仲間作り」・「目標作り」 中央交流の家 職員

- ① 南三陸町の小学生とそれ以外の地域の小学生男女を半数ずつに分けたグループを作り，協力して問題を解決するゲームを行いグループ内で助け合ったり，仲間を応援する気持ちを持てるようにした。

##### 【ゲームの内容】

- ア. ミラーストレッチ イ. 押し相撲  
ウ. みんなオニ エ. キャンプネームを決める  
オ. 自己紹介ゲーム(ネームトス等) カ. キャッチ  
キ. ラインアップ(並びかえ) ク. シットアップ ケ. フープくぐり

- ② 「仲間と一緒に支え合い・励まし合って富士登山に挑戦する」気持ちを強く持つために，個人とグループの目標を設定した。その際，目標を具体的に表わすために，「グループ内で聴けるといい言葉は？」や「見ることができたらいい行動は？」という言葉を投稿かけた。

また，一人一人の目標を旗に書くことによって，「見える化」し，目標を意識するようになった。



#### (2) 「グループで野外炊事（カレーライス作り）」 中央交流の家 職員

- ① 「こんなおいしいカレーはじめて食べた」と，友達と協力して作ったごはんの味を噛みしめた。
- ② 食事や片付けの目標時間を設定することで，子ど



もたちが分担を工夫し、自分の仕事だけでなくグループの友達の仕事を手伝ってカレーを完成させるようにした。

### (3)「富士山こどもの国での自然体験・創作活動」 中央交流の家 職員

① 前日にグループごと、こどもの国での行動計画を相談し決めることで、グループの仲間と一緒に楽しむ気持ちを大切にしたい。

② 子どもたちは真夏の30℃近い青空の下、広い園内をグループごとに計画したカヌー体験や水遊び・創作活動を楽しんだ。

グループのボランティアリーダーには、こまめな水分補給と1時間毎に日陰での休息を取るよう指示をし、安全に楽しむことを心掛けた。

③ 帰りのバスでは、「みんなで頑張れば富士山にも絶対登れるね」という会話が聞かれるなど、子どもたちはクタクタになるまで楽しんだことで仲間との深い絆を感じることができた。



### (4)「富士登山」 富士山ガイド：やまぼうしの会 若林 豊 氏 《登山の準備》

① グループ全員で行ない、登山靴の履き方や雨具・スパッツの装着の仕方などをお互いに教え合い、協力して準備を進めた。

② 登山ルートを確認し、登山への不安感と安易感を取り除き、また、歩き方や高山病の予防、緊急時の行動等、富士登山の危険さ・困難さを伝えた。

③ 全員で作った旗を囲み、円陣を組んで声を掛け、仲間と一緒に挑戦し頑張ろうという気持ちを持たせた。

④ 昨年のキャンプ参加者(2名)から、「去年は悪天候のため途中下山して悔しかった」という話を聞いて、子どもたちは昨年の参加者の分まで全員で頑張るという気持ちを強く持った。



#### 《登山1日目》

① 須走口5合目(2,000m)11時出発(快晴)、「大丈夫かな、頑張れるかな」と少し弱気になった者には、グループの仲間から「一緒に頑張ろう、大丈夫だよ」との声が掛けられた。

また、グループのボランティアリーダーが積極的に声を出して、子どもたちが自然と声を出しやすいような雰囲気を作った。

② 歩き始めて3時間半、本6合目山小屋(2,700m)に到着。額に汗がにじむほどの暑さのため、スタッフは休憩時には二口程度の水を必ず飲むこと、止まったときには大きく深呼吸をすること、服を脱ぐなど体温調節をすることを子どもたちに繰り返し伝え、疲労と高山病への対処をした。

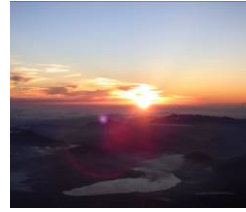
③ 本7合目山小屋(3,200m)まで6時間半、途中、疲労で遅れる者にはスタッフよりもグループの仲間からの「あと少し、一緒に頑張ろう」など、温かい励ましが大きなエネルギーとなり全員が予定時間に到着した。





## 《登山2日目》

- ① 「みんなで山頂まで頑張ろう」、まだきれいな星空の見える早朝4時の出発時には、スタッフと子どもたちが全員で互いに声を掛け合い、気持ちを一つにしてスタートした。



- ② 8合目付近で遠く雲の上に昇るきれいなご来光を初めて見た子どもたちは、感動し言葉もなくその太陽をじっと見つめていた。スタッフは、さらに全員の気持ちを一つにするために、その太陽に向かって「バンザイ！」の掛け声とともにみんなで頑張る気持ちを子どもたちに伝えた。



- ③ 午前8時、2日間で10時間以上を歩き山頂(3,776m)に到達した子どもたちは、お互いにここまで頑張れたのは仲間のおかげだったということ伝え合い、喜びをかみしめた。
- ④ 昨年参加して悪天候のため途中で下山をした2名の子どもは、山頂に立った喜びと感動を、昨年の参加者に届けたいと一年前の大切な仲間のことを思って大粒の涙をこぼしていた。

- ⑤ 「もう歩かない」。下山の途中で男の子が座りこんだ。グループの仲間とのやりとりを叱られたことが原因だった。スタッフは、座りこんだ子どもが自分の気持ちを素直に言えるような対応をし、落ち着かせるとともに自身の行動を振り返る時間を作ることで、最後までグループの仲間と一緒に下山することができた。



- ⑥ 子どもたちは、山頂に立ったことで得た達成感と自信に満ちた表情で砂煙の中、下山をはじめて5時間半、須走口5合目のゴールに到着した。

## 《片付けと振り返り》

- ① 「一緒に登った仲間、支えてくれた人達すべての人にありがとうございます」、子どもたちは使用した用具を大切に片付けることで、多くの人に協力してもらい登山ができたことに気づき感謝した。
- ② 登山の振り返りでは、「協力すればどんな大変なことでも必ず乗り越えられる」、「旗に書いた目標を達成できて良かった」、「みんなで助け合い、協力して活動することができたことを忘れずにこれからの生活を送りたいです」などの意見が出た。
- ③ 個人・グループで設定した目標が達成されたか、また、その理由をグループの話し合いにより意識させることで、子どもたち自身が頑張ったことやこれからの生活に生かせることは何かに気づくようにした。



## (5)「富士山麓での植樹」 講師:富士山ナショナルトラスト【御殿場口5合目】

「なぜ、植樹をするんですか?」子どもたちの質問に講師は、「地震、津波、台風など、時に、自然は人間に猛威をふるいます。でも人間はこの自然の中で生きていきます。だから、人間が自然を育て、環境を守っ



ていくためです」と答えた。自然を守る活動を体験することを通して、子どもたちに自然と共に生きていくことを伝えた。

#### (6) 「キャンプのまとめ」 中央交流の家 職員

- ① グループごとにキャンプを振り返り、感想や目標の達成度とその理由を話し合い、一人ひとりが体験を言語化することにより、自己の成長や仲間とのつながりを確認した。
- ② 子どもたちからは、「私はこのキャンプで【絆】と【友情】の大切さを学びました。そして、【努力】することの大切さを感じました」などの意見が出た。
- ③ まとめとして、これからの自分の生き方を見つめ、家族に対する感謝の気持ちを手紙に書いた。
- ④ 他の人とは話さずに自分でじっくり書くために、手紙を書く場所は自分で自由に選べた。手紙はキャンプ後に郵送で直接、参加者の家族のもとに交流の家から送った。



#### (7) 「お別れ会」 中央交流の家 職員

- ① キャンプでの思い出に残るシーンをスライドショーにまとめ、楽しかったこと、苦しかったこと、頑張ったことなど仲間と一緒に笑顔で振り返り、絆を深めた。
- ② 個人の目標・グループの目標の書かれた大きな旗を囲み、感謝の気持ちとともにひとり一言キャンプの思い出を語った。「言葉にできない感動がたくさんあって、胸がいっぱいです」など、言葉に詰まる子どもや仲間の想いを聴いて涙を流す子どももいた。
- ③ 生涯にわたる友達ができた記念に、一人ひとりに用意したTシャツにそれぞれの仲間が寄せ書きをし、キャンプでの出会いを大切な宝物にした。



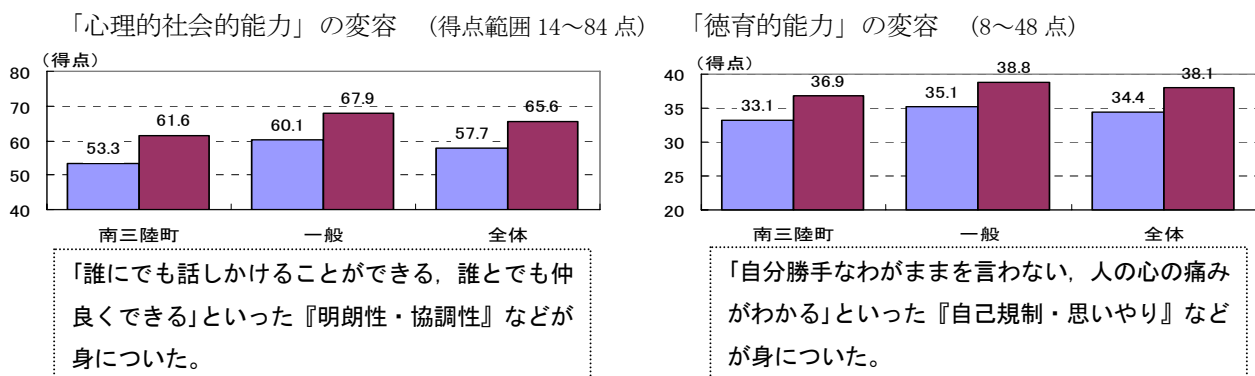
## 5. 評価

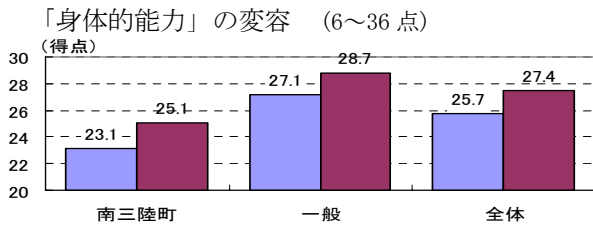
### (1) 評価の方法（アンケート調査の実施）

参加児童に対して子どもたちがこのキャンプでどのような力を身につけたのかを検証するために「IKR 評定用紙（簡易版）」を使って質問紙調査を実施した。

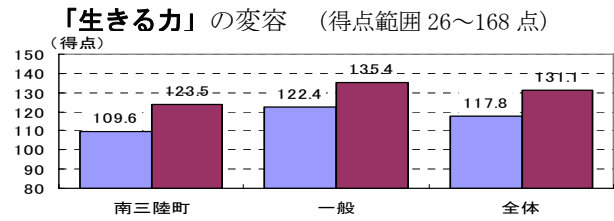
### (2) 結果

次の通り、子どもたちの「生きる力」が高まったことが分かった。





「早寝早起きである、暑さや寒さに負けない」といった『日常的行動力・身体的耐性』が身についた。



「長期間、寝食をともにした生活を送ったことや、富士登山という困難な挑戦をやり遂げたことで『生きる力』を高めたといえる。

### Ⅲ 事業の企画と運営

#### 1. 企画のポイント

##### (1) 事業を継続することの意味

- ① 本事業は、昨年度に続いて2年目である。事業を企画する上での「思い」を、平成23年3月11日(金)東日本大震災という未曾有の大震災で被災した子どもたちのために、中央交流の家ができることを継続して行っていくとした。
- ② 被災していない地域の子どもたちにとっては、震災を風化させないことにつながると考えた。

##### (2) 生きる力をはぐくむ指導

- ① 富士登山に仲間と一緒に支え合い、励まし合いながら挑戦するという気持ちを持たせるため、登山の前にはグループで一緒に過ごす時間や協力して行う活動、グループで話し合いを行う場面を数多く設定し、登山の前にグループの絆を深めた。
- ② 富士登山への挑戦に向けて、昨年度の経験から事前の準備として用具の装着や体調管理など、自分のことは自分でしっかりできるようにするため、具体的な指導をする時間を登山当日まで毎日設定した。
- ③ 自然の猛威によって困難な生活を送っている子どもたちにとって、今後も自然は必要不可欠な舞台であり、自然との共生を図っていくことが大切であると考え、自然環境の保全に関わる専門家から自然との関わりについて話を聞き、保全活動の体験をすることとした。

#### 2. 運営のポイント

##### (1) 被災した地域の教育委員会の協力を依頼すること

現地での参加者の募集や取りまとめ、事前連絡及び実際の事業時における引率・指導、また、キャンプに係る経費の協力を依頼した。

##### (2) 補助スタッフの確保と指導をすること

- ① 当所の登録ボランティア、小学校教員、過去にキャンプリーダーの経験がある19歳~32歳までの若者10名が参加した。
- ② 各グループにリーダーとして2名ずつ配置し、主・副の役割を課したことで、子ども達の話し合いやグループ活動の支援を十分にすることができた。
- ③ 事前打合せで、補助スタッフの心構えや役割などを伝え、職員との共通理解を図った。また、キャンプ中も、毎日打ち合わせの時間を持ち、子どもたちへの接し方などについ

て、意見交換・確認した。

- ④ 昨年度キャンプ中に起こった事象を取り上げ、その時の対処を確認した。また、スタッフの目が離れたときに問題が起こるという意識を各自が持ち、問題が起きたときこそが、指導のタイミングであることを確認した。

### 3. 指導のポイント

#### (1) 仲間と支え合い励まし合いながら登るという意識を持たせる指導

- ① 困難なことでも、仲間と支え合い励まし合いながら挑戦すれば達成できるということを体感するようにした。
- ② 仲間と支え合い励まし合う気持ちを高めるために、スタッフやグループリーダーから子どもたちへの「ありがとう」という言葉掛けを多くするようにした。また、子どもたちにもグループの中で互いに、「ありがとう」を掛け合うように意識させた。
- ③ 毎日、グループ内でのリーダー役を交替して行うことで、一人ひとりがグループ活動への参画意識を高め、互いに助け合い協力して活動する気持ちを高めるようにした。

#### (2) 活動の意識化と体験の内面化

- ① グループや個人の目標を設定することで、意識して活動するようにした。
- ② 活動の後に、活動の中で起こったことや、その時の自分や仲間の気持ちを考える時間を設けることで、活動を通して学んだことの内面化を図った。

### 4. 成果と課題

#### (1) 成果

「IKR テスト」(簡易版)の結果から、子ども達の生きる力を高めることが出来たと言えよう。

これは、個人、グループに目標を設定させ、その目標を意識することや共有することの指導や、「ありがとう」という言葉を、スタッフや子どもたち同士、多くの場面で発するようになった指導が効果的だったと考えられる。

また、被災した地域の子供達と被災していない地域の子供達との交流事業は、双方にとって意味のある事業だと言えよう。

#### (2) 課題

被災した地域の復興や子ども達の心身のケアには長い年月が必要であることから、こうした事業を継続していくこと、また、心身のケアに繋がる自然体験活動や共同宿泊体験のプログラムを開発していくことが課題である。

担当：望月省吾，長谷川大地，中村匡寛